

石井 楓子

with

横島 礼理

バッハから開かれていく、
祈りと幻想の風景。
そして、魂の対話へ——



Violin 横島 礼理

YOKOSHIMA Masamichi, Violin

1991年生まれ、東京都出身。5歳よりヴァイオリンを始める。
桐朋女子高等学校(共学)、桐朋学園大学を卒業。
第62回全日本学生音楽コンクール東京大会、全国大会1位。併せて兎束賞・東儀賞・日本放送協会賞を受賞。
これまでに堀正文、久保良治、飯田芳江、草野玲子の各氏に師事。
N響アカデミーを経て、現在NHK交響楽団次席奏者。

2026年
10月29日(木)

開場 18:30/開演 19:00

入場料 会員 5,000円 (座席指定可)
一般 5,500円 (全席自由席)
学生 2,500円 (全席自由席)

ご予約はこちら



Program

J.S.バッハ：組曲 ヘ短調 BWV823

八村義夫：彼岸花の幻想 (1969年)

フランク：プレリュード、コラールとフーガ ロ短調 M.21

ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第10番 ト長調 Op.96

シューマン：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ短調 Op.105

Piano 石井 楓子

ISHII Fuko, Piano

2022年第17回グリーグ国際ピアノコンクール(ベルゲン)優勝。
また2019年第2回ブラームス国際ピアノコンクール(デトモルト)第1位。第82回日本音楽コンクールピアノ部門第1位。桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学卒業。
ケルン音楽大学、バーゼル音楽院で学び、修士課程・演奏家課程を最高点で卒業。
これまでにバーゼル交響楽団、デトモルト州立劇場管弦楽団、ベルゲン交響楽団、NHK交響楽団、京都市交響楽団をはじめとする国内外の多くのオーケストラと共演、ウィーン楽友協会ブラームスホール、グリークホール(ノルウェー)などで演奏を行う。
2014年度大和市芸術文化未来賞受賞。
現在、桐朋学園大学ピアノ科非常勤講師。

石井 楓子 *with* 横島 礼理

123
Shibuya Mitake Salon (vol.197)

2026年10月29日(木)

開場 18:30/開演 19:00

入場料:会員5,000円(座席指定可)/
一般5,500円/学生2,500円(全席自由席)

バッハから開かれていく、祈りと幻想の風景。 そして、魂の対話へ——

ピアニスト、石井楓子の音楽には、作品の構造を明晰に捉える知性と、その奥に潜む感情の揺らぎをすくい上げる感性とが、無理なく同居している。

スケールの大きな響きを生み出しながらも、作品が本来もつ呼吸に丁寧に耳を澄ませ、その内側にあるものを鮮やかに立ち上げていく。

美竹サロンへの再登場となる今回は、その持ち味が、前半の独奏と後半の二重奏という二つのかたちで示される。

今、彼女が取り組みたい作品を集めた、まさに渾身のプログラムである。

幕開けは、J.S.バッハの《組曲 へ短調》である。

今日ではピアノでも奏でられるが、チェンバロを思わせる引き締まった輪郭と、繊細な陰影をもつ作品である。

わずかな音の動きにも表情が宿り、簡潔な舞曲のなかから、バロックの空気が静かに立ち上がってくる。

続く八村義夫の《彼岸花の幻想》では、その端正な線はたちまち揺らぎ、音は色彩と気配へと変わっていく。

八村は、幼少期に目にした彼岸花の鮮烈な記憶をもとに、「透明で不吉な予感」を意図してこの作品を書いたという。

鮮やかな花の色、不協和音のざわめき、現れては消える光。

記憶の底に残された像が、現実とも夢ともつかぬ音の風景となって立ち現れる。

バッハの明晰な輪郭から、現実と幻想の境がはどけるような世界へと、ピアノはその表情を大きく変える。

そして前半を締めくくるフランクの《前奏曲、コラールとフーガ》では、響きはさらに厚みと奥行きを増していく。

石井のピアノによって、この作品のもつスケールと深い陰影は、いっそう鮮やかに立ち上がることだろう。

長くオルガニストとして教会の空間に親しんだフランクの音楽には、ピアノ一台から発せられるとは思えないほどの重層的な広がりがある。

低音から高音へと積み重なる響き、遠くから呼び交わすような声部、そして堂々と立ち現れるコラール。

それは、チェンバロを思わせるバッハの細やかな線とは対照的な、オルガンのように壮大な音の大伽藍である。

バッハの簡潔な舞曲から、八村の鮮烈な幻想を経て、フランクの壮大な祈りへ——

同じピアノという楽器が、細い一本の線から幾層もの響きへと姿を変えていくところにも、前半の大きな聴きどころがある。

後半には、NHK交響楽団で第2ヴァイオリン次席を務める横島礼理が登場する。

石井と横島は、桐朋学園時代の同級生である。

同じ学び舎で時を過ごし、その後それぞれの道で音楽を深めてきた二人が、いま再び向き合う。

そこには、単なる親しきにとどまらない、互いの音楽の変化を知る者同士ならではの信頼と、静かな緊張が生まれるはずである。

ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ第10番は、彼が遺した最後のヴァイオリン・ソナタである。

ここには、中期の作品に見られるような劇的な対立や、外へ向かって放たれる英雄的な力は、もはや前面には現れない。

むしろ二つの楽器は、互いの声を遮ることなく、慎重に耳を傾けながら音楽を進めていく。華やかさよりも親密さ、主張よりも対話が、この作品の美しさを形づくっている。

それに対して、シューマンのヴァイオリン・ソナタ第1番は、内に秘められていた情熱が、冒頭から堰を切ったようにあふれ出す音楽である。

ヴァイオリンとピアノは、穏やかに言葉を交わすというより、互いを突き動かし、ときに追い立てるようにして進んでいく。

ベートーヴェンの静かな対話を経たあとだからこそ、その切迫したロマンは、いっそう鮮明に響くことだろう。

一人のピアニストが辿る祈りと幻想から、二人の演奏家による親密で激しい対話へ——

このプログラムは、性格や時代の異なる作品を単に多彩に並べたものではない。

バッハに始まり、八村、フランク、ベートーヴェン、シューマンへと進むにつれて、響きは少しずつ姿を変えながら、より深い場所へと向かっていく。

聴き手もまた、その流れに身を委ねるうちに、いつしか音楽の内側へと引き込まれていくのではないだろうか。

演奏家の思索や感情は、舞台上立った瞬間、音となって一気に解き放たれる。

それは、いわば芸術の爆発である。

けれども、その瞬間は演奏家だけのものではない。

目の前で耳を澄ませ、その響きを受け止める聴き手がいることで、音楽はその場限りの、生きたものとなる。

音楽家が思いきり表現し、聴き手がそれを間近で受け取ることのできる場所。

美竹サロンが目指してきた「開かれた場」とは、きっとそのようなものなのだと思う。

今回の公演では、その醍醐味を存分に味わっていただければ幸いです。

(渋谷美竹サロン)



日本のトップクラスの演奏家たちが、
こだわり抜いた価値ある企画をお届けしていきます。

渋谷美竹サロン(美竹清花さろん)が追求する
“本物の音楽”は、演奏者と参加者とわたしたちの、
三位一体の努力と対話から生まれます。



誕生。
クラシック音楽サロン、
渋谷駅 徒歩2分
宮益坂、

サロン・メンバーズ
入会の詳細はこちら
(一時停止中)



●お問い合わせ

株式会社 ILA 渋谷美竹サロン (美竹清花さろん)

東京都渋谷区渋谷1-12-8 (〒150-0002)

☎ 03-6452-6711 (月・金 10:30-17:00)

070-2168-8484 (繋がりにくい場合)

Fax 03 (3409) 0188



公式Webサイト